

クリュノストモスの解釈学

—— 神理解の可能性と

不可能性の問題を巡って——

武 藤 慎 一

四世紀後半に活躍したヨアンネス・クリュノストモスはギリシャ教父最大の聖書講解者と目され、その聖書解釈の影響は現代の聖書学にまで及んでいゝる。彼はアンティオキアの学統に属し、一般に字義的、歴史的、また予言論的解釈と言われる膨大な聖書講解を遺している。ところで、実際の釈義の背後には何らかの解釈原理が伏在し、個々のテクスト解釈を規定しているが、それはクリュノストモスの場合、いかなるものだったのだろうか。本研究ではその解釈学上の根本原理を明らかにしたい。

さて、神的事柄に関する解釈を論じる場合、避けて通れないのが神理解の可能性の問題だろう。実際、クリュノストモスの最も重要な神学思想もこの問題に関するものであった。彼は一方では、「神自身が自らを知るのと同様に私は神を知っている」というエウノミオス派の主張を徹底的に論駁し、神理解の不可能性の側面を強調する。しかし他方では、説教者としての

クリュノストモスの解釈学

彼の立場から聴衆にとって神は理解出来る方であると主張し、神理解の可能性の側面を強調するのである。神理解の可能性と不可能性、この両者の関係は実際いかなるものだったのだろうか。

無論、クリュノストモスの実際の釈義を扱った研究はゴージェイ (P. Jordan)⁽²⁾ によるもの等多数ある。他方、クリュノストモスの「把握不可能性」概念そのものはアマン・ド・メンディエタ (E. Armand de Mendiceta)⁽³⁾ らによって研究されて来たが、その両方を関連付けて研究したものはない。

もう少し詳しく見てみよう。まず釈義の方では既にチェイス (J. Chase)⁽⁴⁾ がクリュノストモスの聖書解釈全体を扱っているが、個々の釈義を詳細に検討する一方で、根本的解釈原理や思想的な関連では「適応」の原理に若干触れているに過ぎない。この「適応」はファッピ (F. Fabbri)⁽⁵⁾ によっても研究されているが、それは聖書靈感に関するもので、靈感が静態的に捉えられる傾向がある。その点、ヒル (H. Hill)⁽⁶⁾ の研究は秀でていて、何分研究範囲が『イザヤ書講話』に限られているため、そこで見いだされた思想とクリュノストモスの聖書解釈全体との関係は明らかでない。また、「把握不可能性」の方もオットー (R. Otto)⁽⁷⁾ 以来研究されて来たが、解釈学的な視点からの研究はなされていない。フィットカウ (G. Fittkau)⁽⁸⁾ もその『ヨハネス・クリュノストモスに於ける秘義概念』の中で「把握不可

能性」に触れてはいるが周刃的な議論に留まっている。

つまり、クリュソストモスの重要な思想と彼の聖書解釈との関係を扱った研究自体が少なかったのである。まして、クリュソストモスの解釈学を神理解の可能性と不可能性の問題との関連で総合的に論じた研究は皆無に等しかった、と言える。とはいえ、この問題の研究の必要性そのものは「神の把握不可能性とピラントロピアとの問題」という形で、既にカーター (Carter) によって『クリュソストモス研究の将来』という講演の中で指摘されていた。カーターは言っている。

「例えば、クリュソストモスにとって最重要と思われる神の両面、つまり神の把握不可能性とピラントロピアとの注意が払われるべきだろう。この両面は神を人間との関わりの中で語り、キリスト教の宗教体験、殊に典礼の中にある恐れと愛との緊張の基礎をなしている。」

そこで本研究では、基本的にはこのカーターの卓見に基づき、更に解釈学的な視点から神理解の可能性と不可能性の問題を扱うこととする。それによってクリュソストモスの聖書解釈の根本原理を明らかにしてみたい。そのために、まずクリュソストモスが神理解の可能性をどう考えているのかを検討し、続いて神理解の不可能性の方はどう考えられているのかを探っていく。その上で両者の関係を明らかにし、最後にクリュソストモスの解釈学の実践的展開を考察してみたい。

一、神理解の可能性

果たして人は神の語りを理解することが出来るのだろうか。クリュソストモスはこの問いに明確に「然り」と答えている。それは次の三つの点から言うことが出来る。まず第一に、神自身の意図に関してである。果たして神自らは人に解されることを望んでいるのだろうか。これに関しては例えば、「幸いなるモーセが、いやむしる聖霊がこの人の舌によって我々に教えたいと思っておられる」と明言されている。

第二に、神の自己表現方法に関することである。たとい神自らが人に理解されることを意図したとしても、それだけでただちに人が神を理解出来るようになるわけではない。そのためには、神は人の理解出来る仕方で自らを表現しなければならぬ。それをクリュソストモスは「適応」(συγκαταβασις)と呼ぶ。これは神の愛に起因する。人はこの神の適応によって初めて神が理解出来るようになる、というのである。

第三に、神の表現の記録としての聖書に関してである。たとい、かつて神が人が理解出来るように自己を表現したとしても、それはその場限りで終わってしまうことになりかねない。そこで、神の表現が後々のために記録される必要があるわけである。この記録されたものが聖書なのだが、これに関してクリュソストモスは「聖書にあることは皆明確かつ直截で、必要なこ

とは皆明瞭」と断じ、その明瞭性を主張している。

以上見て来たように、クリュノストモスにとって神の語りは人にとって十分理解可能なものであり、それは神の意図、神の適応、聖書の明瞭性のそれぞれの局面に於いて確証されているのである。

しかし、現に人は神を理解しているのだろうか。クリュノストモスが言うように神は理解可能なのだとすれば、当然人は神を理解している筈である。しかし、クリュノストモスはそうは考えない。むしろ、クリュノストモスは「我々は御子をも知らなければならぬほどには知っていない」と言う。つまり、神に関する我々の理解はその当然あるべき基準には達していないのである。何故だろうか。それはもはや神の側の原因によるものではなく、人の側の問題によるものである。つまり、人の甚だしい懈怠 (*apathia*) による。人間の本性は怠けやすいものだからである。クリュノストモスによると、それで人は、それ自体としては十分分かる筈の神の語りをも理解出来ないほどの甚だしい懈怠に陥っている。それで、人は当然傾聴す (*prooikneuo*)、べきところを傾聴していない、というのである。

二、神理解の不可能性

一方でクリュノストモスは神の「把握不可能性」(*aparadigma*)、つまり、神の人に捉えられない性質を強く主張する。しかも、

クリュノストモスの解釈学

彼の把握不可能論は相当徹底したものである。クリュノストモスによると、神はその創造、摂理に於いて把握不可能である。つまり、神の経綸を把握することは出来ないのである。更にまた神の属性、そして何よりも神の本質は捉えることが出来ない。このような徹底性はクリュノストモスの人間観、そして神観にしっかりと根差している。人間の卑小さと神の偉大さが際立たせられている。クリュノストモスにとって、神とはただ単に人を超越したただけではなく、オットーが正しくも指摘したように、恐ろしきものでもある。従って、この人間に過ぎぬ者が神を理解するなど到底あり得ないのである。

しかし、実際には人はこの神に対していかなる態度を取っているのだろうか。クリュノストモスによると、人は神の把握不可能な事柄に関して「好奇心をもてかかずらい」(*reapeteleoban*)、「穿鑿してゐる」(*metastarouveti*)。神は人の知識の限界を定めたにもかかわらず、人はその限界を越えて穿鑿しようとしている。クリュノストモスはこう言っているのである。

「彼らは、知る者に益をもたらさず知ることも出来ないことを穿鑿してただ無闇にかかずらいが。……(中略)……神御自身が我々に知って貰いたくないことを無理矢理知ろうとしても、知るに至らないし——神が望まれないことをどうして「知り得ようか」——探求による危険が我々に迫るだけなのだからだ。」

つまり、人にはどうしても理解不可能な事柄があるにもかかわらず、人はその好奇心の故に、敢えてそれを知ろうと試みるものなのである。しかしクリュストモスによると、人は理解不可能なことを穿鑿するのではなく、むしろそれを神に「明け渡すこと」(αὐτὸ ἀποδοῦναι)をもって神に相対さなければならぬ。

三、 神理解の可能性と不可能性

さて、この神理解の可能性と不可能性とはどういう関係にあるのだろうか。クリュストモスによると、人の懈怠も好奇心も共にその不完全性に起因している。しかもまた、傾聴することと明け渡すことも互いに密接に関係している。クリュストモスは次のように言っている。

「聖書を知らなければならぬほど知っている者はどんな出来事にもつまみかず、一方では信仰と神の経綸の把握不可能性とに委ね、他方では事由を知って聖書の中に例を見いだして、すべてを気高く忍ぶからである。というのも、すべてにかかわらずわなないこととすべてを知ろうと思わぬこととは知っていることの確かな証拠であるからだ。」
しかもその少し後、「このように神に關しても、すべてを知ろうと思ひ、おこがましくもすべてに關わろうとする者は神の何たるかを全く知らない」と述べ、更にその後、「我々がいつも聖書に聞いているなら、多くのこのような例を見いだすであらう」

う」と言うのである。

ここでは、「聖書を知っている」という積極的な知と「すべてを知ろうとは思わない」という消極的な知とが結び合わされている。真の意味で聖書を知っている人は、知り得ないことは知り得ないということを知っている。これはいわば、「不可知の知」とでも言えるものである。

その意味で、クリュストモスにとって聖書への傾聴と把握不可能性への明け渡しとは表裏一体の関係にあると言えるだろう。つまり神に關する事柄の中で、人が本来分り得るし分かしなければならない事柄と逆に、分り得ないし分かてはならない事柄とがある。しかし、それに対する人の側の対応としては次の二つに大別することが出来る。一つは、理解可能な事柄には傾聴し理解不可能な事柄は神に明け渡すという対応で、こちらがいわば「然るべき対応」である。もう一つは、理解可能な事柄は理解を怠り理解不可能な事柄には好奇心をもって穿鑿するという対応で、こちらの方は「然るべからざる対応」である。結局、神理解の可能性と不可能性とは、この然るべき対応と然るべからざる対応の両者に於いて密接に關連していたのである。

そういうわけで、今度は聖書に於ける神と人との關係の歩みもこの二種類の対応の観点から見ていくことにしたい。クリュストモスによると、元來神と人との間には良好な關係があつ

た。神は文書を媒介にしてではなく直接人に語っていたのである。

「初めに神が人を造られたので、人々が聞くことが出来る仕方では、御自ら人々に語っておられたからである。このような仕方ではアダムに來られ、このような仕方ではカインを叱責され、このような仕方ではノアに語られ、このような仕方ではアブラハムに訪れられたからである。」

しかし、あるうことか、ほどなく「あらゆる人間本性はひどい悪徳へと破船してしまった。」⁽³⁸⁾そして、もはや人は神との語らに値しないようになってしまった。⁽³⁹⁾さて、このようにして人が然るべからざる対応をした時、神の側はどういう対応をしたのだろうか。クリュノストモスは続けて言う。

「神は」もう一度彼らに対する友愛を蘇らせたいと思われ、あたかも長い間「反逆して来た人々に手紙 (yodunara) を送るかのよう」に、あらゆる人間本性を御自身へ引き寄せられる。それ故神は書簡 (re yodunara) を送り、モーセを顧みられた。⁽⁴⁰⁾

つまり、人類が自らの悪徳の故に神との直接的対話という第一の恵みを失ってしまったのにもかかわらず、神は今度は文書を介した対話という第二の恵みをわざわざ用意した、というのである。従ってクリュノストモスにとって、この第二の恵みに対してさえも然るべからざる対応をすることなど到底我慢出来な

かった。⁽⁴¹⁾

しかしその場合でも、ユダヤ人に対しての場合と教会に対しての場合とでは語りの内容に違いがある。例えば、創世記一章とヨハネ伝一章とを対照させて、クリュノストモスは次のように言っている。

「まだ人類はもっと不完全な状態であったし、もっと完全な観察は理解出来ないでいたので、聖霊は聞く者たちの弱さに応じて預言者の舌を動かし我々に一切を語られるからである。雷の子 (ヨハネ) を見なさい。そして、我々の思いの不完全さの故にこうした説明の適応 (ti ohrakatagkasi [ti ohrakatagkasi]) を用いられたことを知りなさい。人類が徳に於いて進歩した時、雷の子 (ヨハネ) は、もはやこの道は行かず、聞き手をもっと高次の教えに導いている。」⁽⁴²⁾

つまり、聖霊は聞き手の対応、聞き手の受容度にに応じて語った。その時その時の聞き手に応じてふさわしい知があり、未だふさわしくない知もある。しかもそのふさわしい知は人がどうしても理解しなければならぬ知なのである。逆にふさわしくない知は決して理解し得ないし、してはならないのである。

このことは旧約の時代だけではなく新約の時代に於いてもそのまま妥当する。つまり、キリストの場合でもパウロの場合でもユダヤ人に対する厳しい見方は全く変わらず、彼らへの語りは不完全とされている。

四、神理解の実際

以上、聖書の中の人々にとつての「聞き手に応ずる神」を見て来た。それでは、この「聞き手に応ずる神」は書かれた聖書を読む側の人にとつていかなる意義があるのだろうか。興味深いことに、今まで見て来たことと全く同様のことが、実際に聖書を理解する側に関しても言われている。

例えば、ユダヤ人に対する非難の矛先はそのまま当時の教会内部にまで向けられている。クリュストモスはヘブル書の受信人のユダヤ人に激しい非難を浴びせた後、次のように言う。

「しかし、ここに立っているあなた方のうちある人はめまがして、『ヘブライ人たちのせいだ自分ももっと完全なことが語られるのを邪魔されたとするなら、それは不当な扱いだ』と思うことだろう。ならば、恐らくここでも少数の人を除き大多数はそういう人たちのだから、これがあなた方に關しても言われていると私は思う。」

つまり、教会内部でも大多数の人はユダヤ人と同じ状態だと言われている。そして、少数の人だけが例外とされている。

しかし、クリュストモスの時代の場合はそれ以前の時代と違って既に聖書が与えられている。従つてこの場合は実際どのようなにして聞き手に応じて語られるのだろうか。これに關しては、次のように言われている。

「我々は知っていることを何度も聞いて益々胸が打たれるからである。例えば、我々は謙遜がよいことで、しかもクリストが何度もそれについて語つたことを知っているが、同じ言葉とそれを思い巡らしたことを聞くなら、何万回聞いても益々感化される。」

ここでは同じ聖書の言葉を繰り返し繰り返し聞くことの効用が語られている。つまり、この場合の「聞き手に応じた語り」というのは、同じ聖書に聞くのでも理解内容がその時々々に於いて異なることによる。

更に、別の箇所では「もし我々がこのように自分を律するなら、御霊の恵みそのものが実に精確に導いてくれるであろう」と述べ、神の側の働きについても触れられている。ここでは、神の語りに傾聴しようとする人の側の努力に神の側の啓示が対応している。人が然るべき対応をすることによって、かつて語られた神の言葉が今實際人に深く理解されていく。つまり、聖書を書き記す働きをした同じ御霊が、今度はその聖書の内容理解を助ける働きをしている、というのである。

結局、ここでは聖書解釈の構図が実践的聖書理解にもそのまま持ち込まれている。つまりクリュストモスにとつて、神は聖書記者を通してその当時の聞き手に応じて語つたのだが、同様にクリュストモスの聴衆に対しても聞き手に応じて語るのである。

五、クリュノストモスの解釈学

以上本研究では、クリュノストモスに於ける神理解の可能性と不可能性の問題について考察し、その結果「聞き手に応じた語り」という原則が新たに見いだされた。では、この原則はクリュノストモスの実際の聖書解釈と具体的にどのような関係にあるのだろうか。

このクリュノストモスの「聞き手に応ずる神」はいわば、「対応に対応する神」と言うことも出来るだろう。つまり、神は聞き手の神に対するその対応に応じて聞き手に対する自らの対応を変えていくのである。聞き手の対応に対応するのである。従って、その対応の歴史の記録である聖書を読み解くためには、当然その時々で神の対応した相手がいかなる者で、神に対していかなる対応をしていたのかを正確に把握することが不可欠であった。そして、そこからいわゆる「歴史的解释」が生じた。

つまり、神の語りの状況、時、場所等、聖書の使信が詳細に検討される必要があったのである。ここでは神の語りと聞き手の状態とが勘案され、それによって聖書の内容の吟味が行われる。それはある時は神の適応によるものと判定され、一層完全な啓示の光の下で再評価される。またある時は「型」(τύπος)であると判断され、一層完全な事柄によって再吟味される。

つまり、この「対応に対する対応」という原則はいわゆる

クリュノストモスの解釈学

「予型論的解释」をも導いた。より不完全な聞き手に対応した語りはより完全な聞き手に対応する語りと対照されなければならない。ここでは、旧約の民に対する神の業は最大限尊重された。神が語った際の状況に注意を払わなければならなかったのである。出来事の事実性・歴史性が認められ、聖書テキストが一字一句詳細に検討された。その上で、現在の聞き手である「我々」との関係が検討される。例えば、旧約の過越しの食事と新約の過越しの小羊としてのキリストとの関連が探求されるのである。

しかもまた、この「対応に対する対応」という原則はただ単に解釈される側に関わるだけでなく、解釈する側にも全く同様に関わる。つまり、聖書の内容は「対応に対応する神」の過去に於ける記録なのだし、聖書を解釈する者は正にその聖書を通して「対応に対応する神」に出会っているのである。今回は書かれた言葉をより深く理解するという形ではあるが、神は神に対する解釈者の対応に対応している。つまり、聞き手が神の語りとしての聖書に熱心に傾聴し、神の把握不可能性に明け渡しさえするならば、神はそれに応じて語るのである。

以上本研究では神理解の可能性と不可能性の問題を巡って、クリュノストモスの解釈学を考察して来た。その結果、従来の研究では見いだされなかったことが明らかになった。

(PG: Migne, Patrologia Graeca).

- 先に見たようにフマッビは靈感を静態的なものとして捉えた。その点、ヒルが靈感を動態的の間に手にも働きかけるものとしたのは正しかうたが、それだけでは不十分である。一歩進んで、その神の働きの仕方が「対応に対する対応」である、しかしその対応は靈感だけに留まらず、神人関係の全体に関連していると言わなければならぬ。
- クリュヌストモスの解釈学の根本原理は「対応に対する対応」である。しかし、その原理は聖書と触れ合い、人々に関与してはななく、聖書と触れる人々との交わりの中にある。
- 註
- 本研究で使用したクリュヌストモスのテクストは次の通りである。
- Jean Chrysostome, Sur l'Incompréhensibilité de Dieu (introduction de Jean Daniélou, texte critique et notes de Anne-Marie Malinreay, traduction de Robert Flacelière), Paris, 1970 (SC 28bis).
- Joannes Chrysostomus, PG, 47-64, Paris, 1862.
- (SC: Sources Chréliennes).
- (1) De incomprehensibili dei natura 2 (SC 28, 154).
 - (2) P. Gorday, Principles of Patristic Exegesis, New York/Toronto, 1983.
 - (3) E. Amand de Mendieta, "L'incompréhensibilité de l'Essence divine d'après Jean Chrysostome", in: Symposium. Studies on St. John Chrysostom, ed. by P. G. Christou, Thessaloniki, 1973, 23-40.
 - (4) F. Chase, Chrysostom: A Study in the History of Biblical Interpretation, Cambridge, 1887.
 - (5) F. Fabbi, "La «Condiscendenza» Divina nell'Ispirazione Biblica Secondo S. Giovanni Crisostomo", Biblica 14 (1983) 330-347.
 - (6) R. Hill, "St John Chrysostom's Teaching on Inspiration in 'Six Homilies on Isaiah'", Vigiliae Christianae 22 (1968) 19-37.
 - (7) R. Otto, "Chrysostomus über das Unbegreifliche in Gott", in: Das Heilige, Breslau, 1923¹⁰, 219-229. 464' ヲケキムルノ民衆や区違ハシメテノ正統ヲ示ス。 Cf. G. Wunderle, "Zur religionsphilosophischen Würdigung der fünf Predigten des heiligen Johannes

- (83) Homiliae in Matthaeum 75, 5 (PG 58, 694).
- (74) Cf. De incomprehensibili dei natura 3 (SC 28, 196f.). 一發に聖長に何聖へのなるのたの神の本體はたへの聖臣聖臣の神の真理を發露せしむれば大なるのたへのハンスとキエの神を以てす。
- (52) Cf. De incomprehensibili dei natura 2 (SC 28, 156ff.).
- (92) Cf. R. Otto, "Chrysostomus über das Unbegreifliche in Gott", in: *Das Heilige, Breslau, 1923*¹⁰, 221.
- (73) ヲの一體をハンスとキエの神とて於ては聖臣たるはたへの聖臣を以てす。
- (82) Homiliae in Ep. ad Ephesios 19, 4 (PG 62, 133).
- (83) De sacerdote 4, 5 (PG 48, 667f.).
- (92) Homiliae in Ep. ad Colossenses 4, 4 (PG 62, 331); Homiliae 67 in Genesis 2, 4 (PG 53, 30).
- (55) Homiliae in Ep. ad Colossenses 4, 2 (PG 62, 328); Homiliae in Ep. I. ad Thessalonicens 9, 1 (PG 62, 445).
- (52) Homiliae in Ep. II. ad Timotheum 8, 4 (PG 62, 647).
- (82) Ibid.
- (55) Ibid. (PG 62, 648).
- (95) Homiliae 67 in Genesis 2, 2 (PG 53, 27f.); cf. Homiliae in Matthaeum 1, 1 (PG 57, 13).
- (92) Ibid. (PG 53, 28).
- (92) Ibid.
- (92) Ibid.
- (92) Cf. Homiliae in Matthaeum 1, 1 (PG 57, 14f.).
- (92) Homiliae 67 in Genesis 3, 2 (PG 53, 34).
- (74) Cf. Homiliae in Ioannem 27, 1 (PG 59, 157).
- (92) Homiliae in Ep. ad Hebraeos 1, 1 (PG 63, 13).
- (92) Homiliae in Ep. ad Hebraeos 8, 2 (PG 63, 70).
- (74) Homiliae in Ep. ad Hebraeos 9, 1 (PG 63, 76).
- (92) Homiliae in Matthaeum 1, 8 (PG 57, 24).
- (92) Cf. Homiliae in Ioannem 40, 1 (PG 59, 229).
- (74) Homiliae in Ep. ad Ephesios 23, 2 (PG 62, 165).